



Title	Australia-Japan Graduate Conference 2014参加記
Author(s)	黛, 友明; ファクンド, ガラシーノ; 鳥居, 大嗣
Citation	日本学報. 2015, 34, p. 215-220
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51394
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Australia-Japan Graduate Conference 2014

参加記

黛友明、ファクンド・ガラシーノ、鳥居大嗣

はじめに

この報告は、オーストラリア国立大学（以下ANU）で開催されたAustralia-Japan Graduate Conference 2014に参加した三人の大学院生（黛友明、ファクンド・ガラシーノ、鳥居大嗣）が、その経験を広く共有するとともに、今後の研究生生活においてどのように活かしていくかを考えるために、共同で執筆したものである。

2014年度前期、辛島理人先生（関西学院大学）による「日本学演習」が、「日本研究を国際的に展開するためのアカデミック・スキルの習得」を目的として開講された。英語でのプレゼンテーションのスキルを学ぶ授業というのは、日本学研究室では初めての試みだった。日本学専門分野の大学院生が主な対象であったが、学部生や他専攻の院生も受講した。

授業としては、丸一日かけて関西学院大学の方々と合同で行った発表会（7月12日、関西学院大学梅田キャンパス）で一段落したが、辛島先生は、ご自身が博士号を取得されたANUの日本研究者の前で授業の成果を発表する機会をAustralia-Japan Graduate Conference 2014というかたちで設けてくださり、受講者のうち上記の3人が参加した。

1 日程

Conferenceを含む7月26日から31日にかけての旅程は以下のとおりである。

- 7月26日 関西国際空港から出発（香港経由）
- 7月27日 オーストラリア・キャンベラに到着
宿泊はANUのユニバーシティハウス
- 7月28日 参加者の個人研究発表会・討論・懇親会
- 7月29日 テッサ・モーリス＝スズキ先生の講演・討論
オーストラリア国立図書館を見学
- 7月30日 シドニーに移動

7月31日 関西国際空港へ到着（香港経由）

今回私たちが参加したAustralia-Japan Graduate Conference 2014は、ANU College of Asia and the Pacificの主催で、日本とオーストラリアの若手研究者の交流を目的として開催されたものである。研究発表をしたのは、大阪大学、関西学院大学、ANUの大学院生であるが、日本に関心をもつオーストラリアの研究者が多数来場し、活発な討論が行われた。次項では、三人のプレゼンテーションの内容とそれに対する会場からのコメントを紹介しておく。



2 個人研究発表について

ガラシーノは、Re-imagining the Empire, Praising the Republic: Japanese Immigrant Speech Activities in Argentina 1932-1945というタイトルで研究発表を行った。アルゼンチンにおける先駆的な日本移民として記憶される^{しんやよしお}榛葉賛雄の言論活動を取り上げ、とりわけ1930年代を通して榛葉が描いたアルゼンチン像・日本像の特徴を概観した。榛葉が、一方で移民社会の代表者として「アルゼンチンの発展」に貢献すると公言しながら、他方で日本帝国の「真の姿」を精力的に宣伝し、2つのナショナリズムに関与したことを指摘するとともに、太平洋戦争開戦直前、あたかも南米で「東亜新秩序」に呼応するかのよう
に、アルゼンチンが20世紀の「新世界の文明」を指導するであろうと主張して、独自の

折衷的な新秩序構想を打ち立てたことをも指摘した。また、移住地で日本帝国の利害を引き受けることで榛葉が指導的知識人としての自らの立場を強化するとともに、プロパガンダが日本移民排斥運動の予防策としての機能も持ったという側面についても考察した。

その後、質疑応答の時間に移り、フロアの参加者からたくさんの指摘と質問があった。ここでその詳細を紹介することはできないので、発表の様式をめぐって指摘された点のみを紹介しておきたい。発表者が日本での慣例に従って先行研究の整理を行ったことに対して、英語圏の口頭発表において肝要なのは、発表者個人の中心的なアイデアを明確に打ち出すことであるので、他人のアイデアを整理することは不要である、という指摘を受けた。この点についてはさらに後述する。

鳥居は、History of Godzilla: How We Memorize and Forgetというタイトルでプレゼンテーションを行い、日本映画『ゴジラ』に連なる怪獣映画の歴史を順に見ていきながら、その中で製作者よりもむしろ観客らによって怪獣ゴジラの象徴性が作り上げられていった過程を明らかにした。

質疑応答では、アメリカで製作された二つの海外版「ゴジラ」についての質問が出た。発表者がそれらの作品に対する日本のファンの対照的な反応を紹介すると、そこにはファンにとって何が真正とされているのかという問題（= authenticityの問題）があるのではないかという指摘が返ってきた。

黛によるプレゼンテーションはProfessionalism and the Folk Performing art: Focusing on *Isedaikagura*というタイトルで行われた。内容としては、日本における民俗芸能とその研究を紹介し、伊勢大神楽をプロフェッショナルという視点から分析し、その特徴を述べるというものだった。あまり知られていない対象であるため、写真や映像を用いて説明した。

質疑応答では、プレゼンテーションのあり方についての意見が出た。まず、対象を取り上げる理由がよくわからなかったので、はじめに研究のフレームワークをしっかりと提示してほしいという意見をいただいた。黛の意図としては、先行研究を紹介しつつ問題意識を述べることで、それを示したつもりだった。しかし、求められていたのは、自分のアイデアを効果的に説明できるような報告の枠組のここのようだった。

内容については、professionalismという言葉の定義があいまいであるという指摘があった。休憩時に詳しい話を伺った際には、伝統的な大工と建築士のコンフリクトを扱った英語圏の論文を教えていただいた。英語で発表するということは、英語圏の研究の文脈で概念が解釈されることでもあるということにあらためて気づかされた。他にも、担い手の資格や、神道の大衆化といった現象との関わりについての疑問も出た。

3 ANUの学生さんの発表を聞いて

ANU側からは、3人がプレゼンテーションを行った。発表のテーマは、マレーシアに住む日本人退職者についてジェンダー・身体・感覚に着目し文化人類学的に分析したもの、原子力発電所を抱える自治体と再稼働の問題を電源三法という法律的側面から考察したもの、「健康食」に付与されるイメージとその価値観についてオーストラリアと日本を比較したものであった。その内容についてはここで詳しく述べることはしない。本報告で重要なのはその発表から受けた印象である。

まず、話としての形がよく整っていて、とても聞きやすかった。まるで、発表者が語りかけてくるような感覚であった。具体的に言えば、枠組の説明が導入部分でしっかりなされていたこと、そして効果的に図表や写真といった視覚資料に注意を向けさせ、聴衆を飽きさせることなく話を展開するようにしていた。そして、発表後の質疑応答も、形式的なものではなく、非常に対話的であった。この点については、「おわりに」で詳しく述べる。

4 テッサ・モーリス＝スズキ先生の講演を聞いて

発表の翌日は、午前中、テッサ・モーリス＝スズキ先生による講演が行われた。ご多忙の中、長時間に渡って講演してくださったことに感謝したい。その内容は、東アジアにおける様々な記憶のあり方と、日韓関係における「和解」という概念を再考するという、アクチュアルなテーマであった。質疑応答の時間も十分に設けられており、活発な討論が行われた。多様な立場や記憶を含めた「和解」への対話はどこから始まり得るのか、あらためて考えさせられた¹⁾。

この日の午後は、The National Library of Australiaで、日本を担当する司書の篠崎まゆみさんがAsian Collectionsを案内してくださった。とりわけ、東日本大震災・福島原子力発電所事故に関わる、様々な市民団体や運動、自治体などのウェブ・サイトやブログを中心にURLを収集し公開している活動²⁾は興味深かった。そのほか、キャンベラでは、Australian War Memorial、Canberra Nara Park、シドニーではAnzac Memorial、Royal Botanic Gardens、Sydney Opera Houseなどを見学し、オーストラリアを満喫した。

おわりに

今回の経験をどのように活かしていくかについて議論した結果、次のようなとりあえずの結論を得た。

1つ目は、オーストラリアの研究者（英語圏と言ってもいいかもしれない）は、口頭発表に対する姿勢を、対面的なコミュニケーションとして考えているということである。日

本での学会発表の場合、読み上げ原稿を用意し、それを時間内に読み上げれば問題ないものとされている。しかし、それを英語にすれば英語でのプレゼンテーションになるわけではないことを、身を持って知らされた。それは、英語の能力の問題ではなく、多様な関心を持つ人びとに向けて自身の研究について話すことに対する認識が、根本的に異なっていたからである。どうすれば、自分の研究のフレームワークをクリアに打ち出して、アイデアに対する的確なコメントをもらうことができるか。ANUの大学院生たちの発表は、英語がうまいというだけでなく、報告を上手に構成しパワーポイントを有効に活用するとともに、身振りや手振りをを用いて、語りかけるように展開していたことが印象的だった。

2つ目は、「日本研究」という分野に対する意識と姿勢である。この点は、「日本にいると、自分のやっていることを日本研究だとは考えないでしょう」という、オーストラリアで言われた一言に集約される。ANUのCollege of Asia and the Pacificという専攻においては、自身の研究を、日本をアジア・太平洋地域との関係を踏まえて考えたいうえで、位置づけなければならない。しかし、私たちは日本の研究状況（先行研究）の文脈のなかで思考するにとどまり、それが外でどう受け止められるかについて積極的に考えてこなかった。自分たちのプレゼンテーションが、民俗学やサブカルチャー研究、思想史といった学問領域の個別研究としてではなく、アジアの中の日本についての研究として受け止められるということは、当然のことではあるが、新鮮な経験であり、英語で報告する際に——正確には、日本の研究状況を前提としない聴衆に向けて報告する際に——どのような点に留意して報告を構成しなければならないのか気づかされる、貴重な経験であった。

しかし、3つ目として挙げておきたいのは、私たちのそのような経験は、「日本は遅れている。グローバル化しなければ」という新自由主義的な思考と親和性のある発想とは、一見似通っているけれども実は全く別のものである、という点である。「スーパーグローバル大学」というような言葉がもてはやされるなかで、このことを強く意識しておくことは重要であるだろう。アジアの中の日本、世界の中の日本という視点は、たしかに重要である。しかし、だからといって、日本の研究状況が全く意味のないものであるということにはならないだろう。問題は、どちらが重要かということではない。いかに自身の立場を相対化し、多角的な視点を取り入れ、自分の研究成果を多様な文脈で提示できるようにしていくか。そのために、英語によるプレゼンテーションという手段を活用していくことが重要なのではないか。

最後に、このような貴重な経験を与えてくださった辛島先生、オーストラリアで様々な便宜を図ってくださった小林やす子先生、高橋進之介先生、根岸海馬さん、たくさんコメントをくださった池田俊一先生、国立図書館を案内してくださった篠崎まゆみさん、ご多忙のなかご講演くださったテッサ・モーリス＝スズキ先生、会場にいらしてくださった

Australia-Japan Graduate Conference 2014 参加記（黛友明、ファクンド・ガラシーノ、鳥居大嗣）

ANUの学生・教員の方々、ともに発表した関西学院大学の方々に、篤くお礼を申し上げます。
たい。

注

- 1) 講演内容については、Tessa Morris-Suzuki, "Remembrance, reconciliation and East Asian memory wars," *East Asia Forum Quarterly*, Vol.6, No.3, July-September 2014 参照。この論文は、<http://www.eastasiaforum.org/quarterly/#>で公開されている。
- 2) *Japan, Social movements after the Fukushima Nuclear Power Plants crisis, March 11, 2011.*

（まゆずみ ともあき 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）
（ファクンド ガラシーノ 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）
（とりい ひろし 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）